

ワークショップ： コミュニティの トラウマと メンタルヘルス

ー第二次世界大戦のトラウマとケアー

トラウマは、個人、集団だけでなく、コミュニティ全体にも影響を与え、それは世代を超えて伝わっていきます。アートをとおしてのコミュニティのトラウマのケアに取り組んでいるオイゲン・コウ博士と国内の研究者を迎え、世界的な課題である第二次世界大戦のトラウマとケアについてのワークショップを開催しました。その概要を報告します。



日時：2019年6月25日(火) 12:30ー16:30
場所：大阪府こころの健康総合センター

主催：全国精神保健福祉連絡協議会

共催：科学技術振興機構 社会技術研究開発センター「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築」
研究開発領域「トラウマへの気づきを高める“人ー地域ー社会”によるケアシステムの構築」

協力：大阪府こころの健康総合センター、上智大学グリーンケア研究

第二次世界大戦の長期にわたる 世代を超えた影響について

オイゲン・コウ

セントビンセント病院コンサルタント精神科医、精神分析的精神療法家
メルボルン大学人口国際保健学部上級研究員

第二次世界大戦は、30カ国が関与し、7000万人以上が殺された世界史上最悪の戦争でした。戦争が終わった75年後も深刻な影響が続いています。

ヨーロッパにおいて、研究者は、多くの子どものサバイバーが80歳代になった今もPTSDだけでなく不安やうつ病などの症状に苦しみ続けていることを明らかにしました。一部の研究者は、ヨーロッパの現在の政治的不安定、特に極右グループの再出現は、第二次世界大戦からの未解決の問題の結果であることを示唆しています。

この戦争中、日本はドイツやイタリアとともに、イギリスとアメリカが率いる連合国と戦う枢軸国を形成しました。第二次世界大戦の日本への長期的な影響は率直に語られてきませんでした。過去10年間に6回日本を訪れ、多くの日本の精神科医や研究者と密接に協力してきたアウトサイダーとして、戦争について話すことには、一般的に消極的であることに気がきました。彼らは、この消極性は日本社会—政府、組織、一般の人々のすべてのレベルに存在するように見えるという私の観察に同意します。今日、日本における戦争の影響を研究し続けている研究者はごく少数です。

オーストラリアのメルボルンで働く精神科医として、私は、この第二次世界大戦の影響を受けた多くの人々に出会ってきました：これには退役軍人だけでなく、ユダヤ人のホロコーストのサバイバー（多くは戦後にヨーロッパを逃れて南米やオーストラリアに移住しました）などの多くの民間人だけでなく、イタリア人、ドイツ人、さらには日本人が含まれます。私は、戦争のサバイバーの多くの子供や孫が戦争の影響を受けていることに気づき、たいへん驚いています。

今日、ある世代が経験したトラウマがどのように次世代に引き継がれるかについては、かなりの研究や報告があります。この現象をトラウマの世代間伝達と言います。シャワーを浴びるのを恐れて育った女性の話があります。蛇口を回すのを彼女は怖がりました。彼女は、家族全体がホロコーストによってガス室で殺されたという家族の秘密を40年後に母親が話すまで、その理由がわかりませんでした。蛇口を回すことは、彼女に有毒ガスが出ることを無意識に思い起こさせたのです。どういうわけかトラウマは世代を超えて伝達されます。

私はオーストラリアに住んでいた若い日本人女性の治療をしたことがあります。彼女は重度の不安に苦しんでいましたが、その明確な理由はありませんでした。興味深いことに、彼女は戦争中の祖父の兵士としての役割について母親に話した後、彼女の不安は落ち着きました。それはほとんど口にされない家族の秘密でした。

トラウマが秘密にされ、率直に話されないとき、それは特別な力を持ち、数世代にわたって影響を与え続けることができるようです。

私は、第二次世界大戦の日本と日本人への長期的な、世代間の影響について考えてきました。世界中で、ある世代が重度のトラウマの影響を受けたコミュニティは、その後の世代において自殺や暴力の割合が高くなっています。これは日本の状況ですか？

The Long Term Trans-generational Psychosocial Effects of World War 2

Dr Eugen Koh

Consultant Psychiatrist and Psychoanalytic Psychotherapist,
St Vincent's Hospital, Melbourne
Senior Fellow, Melbourne School of Population and Global Health,
University of Melbourne

The Second World War was the worst war in the history of the world, involving 30 countries and more than 70 million people were killed. It continues to have a devastating impact 75 years after the war ended.

In Europe, researchers have found that many child survivors of the war, now in their eighties, continue to suffer symptoms of distress such as anxiety and depression as well as post traumatic stress disorder. Some researchers suggest that the current political instability in Europe, particularly the re-emergence of extreme right wing groups are a result of unresolved problems from the Second World War.

Japan together with Germany and Italy formed the Axis that fought against the Allies, countries led by Britain and the United States, during this war. The long-term impact of the Second World War on Japan has not been spoken about openly. As an outsider who has visited Japan 6 times over the past 10 years, and worked closely with many Japanese psychiatrists and researchers, I have found that there is a general reluctance to talk about the war. They agree with my observation that this reluctance appears to exist in all levels of Japanese society; government, institutions and the common people. There are only a small number of researchers who continued to study the impact of the war on Japan today.

As a psychiatrist working in Melbourne Australia, I have come across many people who have been affected by this Second World War: this includes not only veterans, but many civilians such as survivors of the Jewish Holocaust (many migrated to South America and Australia to get away from Europe after the war) as well as Italians, Germans and even Japanese. I have been most surprised to discover that many children and grandchildren of these survivors of the war have also been affected.

There are now considerable researches and reports on how the trauma experienced by one generation can be transmitted to the next generations. This phenomenon is called the trans-generation transmission of trauma. There is a story of a woman who grew up being afraid of having a shower; the turning on of the tap terrified her. She did not discover why until her mother told her about a family secret 40 years later: that her mother's whole family was killed by the gas chambers during the Holocaust. The turning of the tap unconsciously reminded her of the turning on of the poisonous gas. Somehow, the trauma was transmitted over a generation.

I have personally treated a young Japanese woman who was living in Australia. She was suffering from severe anxiety and there was no obvious reason why she would be anxious. Interestingly, her anxiety settled once she had spoken to her mother about her grandfather's role as a soldier during the war. It was a family secret that was rarely spoken about. It seems that when trauma are kept as secret and not spoken openly, it has a particular power and can continue to have an impact over several generations.

I have been wondering about the possible long-term trans-generation impact of Second World War on Japan and the Japanese people. All round the world, we see communities that are affected by severe trauma in one generation suffer higher rates of suicides and violence in the subsequent generations. Is this the situation in Japan?

復員兵とその子どもたちの戦後

中村江里

日本学術振興会特別研究員PD

精神科医のベセル・A・ヴァン・デア・コルクは、日本人がアジア・太平洋戦争のトラウマ記憶にきちんと向き合っていないと指摘している。欧米の医学史では、ここ半世紀ほどの間に戦争とトラウマの歴史に関する研究が蓄積されてきたが、日本では比較的最近になってから注目されるようになったテーマである。本報告では、戦時中に「戦争神経症（PTSDの先行概念とされる疾患群）」となった患者たちの状況について確認した上で、戦争の被害者であり加害者でもあるという復員兵の両義的なポジショナリティが、個人的／集合的なトラウマ認識や和解にどのような影響を及ぼしたのかを考察した。

日中戦争以降、精神神経疾患の患者のための治療機関は作られたが、内地に送られてきた患者はごく一部であった。国家のために死ぬことを至上の価値とし、徹底的な服従を兵士に求める「皇軍（天皇の軍隊）」のエートスは、政府のプロパガンダだけでなく、戦争神経症の患者の処遇や自己認識にも影響を与えた。軍隊にとって、心因性の神経症は士気低下を意味するものであったため、新聞報道等では患者の存在が隠蔽された。また、当時の精神医学の解釈では、戦争神経症は外傷的な経験というよりは、「戦場から逃避したい」「恩給が欲しい」などの患者の「願望」によって引き起こされると考えられた。以上のような状況の中で、精神疾患になった自分は「国賊」だと考える患者も多かった。

戦後になると、占領軍の非軍事化政策のもとで、傷痍軍人の国費での治療や軍人恩給は、一部の例外を除いて中止され、精神障がいを負った復員兵の状況は戦時中よりもさらに過酷なものになった。また、復員兵にとって、被害と加害が入り混じった戦争経験を語ることは困難であり、個人的／集合的双方のレベルで、戦争の現実と向き合い、和解を促すことを阻む要因になった。しかし、近年になって、辺見庸、村上春樹などの著名な作家が父の戦争体験と向き合う作品を発表し、2018年には「PTSDの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」というピアサポートグループも誕生した。加害を含む復員兵のトラウマ経験について知ることは、加害の構造を理解し、将来的な暴力を防ぐためにも重要なことであり、こうした「復員兵の子ども」世代の活動は、今後ますます重要になるだろう。

南太平洋地域の紀行文と慰霊

西野亮太

フィジー共和国南太平洋大学
国際日本文化研究センター

本発表では、南太平洋地域を旅した日本人の手による紀行文に焦点を置き、旅行者による太平洋戦争の戦跡についての印象を分析した。旅行者は、景色の描写・遺物・霊的現象の記述により日本の犠牲者に対する共感を深めているが、現地の存在と記憶についての考慮は少なく、島々の住民が除外され、旅行者が日本兵の霊や魂と共有する場所と見なしていることを論じた。これらの記述は日本人旅行者による想像的占領にもつながるのではないかとはいえる。

対象にしたのは、敗戦後生まれ、あるいは戦中には幼少で、南太平洋に送られた元兵士達とは血縁関係を持たない8人の旅行者による市販されている9作の紀行文である。本発表では、旅行者が戦跡を実際に訪問することにより、書物や雑誌などの活字や映画やドキュメンタリーなどの映像からのみでは得ることのできない臨場感を組み込み、どのように戦争の記憶を追体験し、歴史を再想像し再創造するのかという行程に注目した。

分析した紀行文に共通していることは日本兵が経験した苦行、飢餓、疾病などの過酷な経験を現地での印象を基に肌で感じ、兵士たちへの同情と共感を述べていることである。しかし、紀行文が述べる戦史の意識や解釈が3つに分かれていることを指摘した。第一は兵士たちを尊い犠牲を払った英雄と捉え、島々を英雄が散った場所と想像すること、第二は兵士たちを軍部の無謀な政策により悲惨な死を迎えたため、島々を悲劇の舞台と想像すること、そして、第三は日本兵を軍部の被害者だけではなく、島々の人にも加害を与えたのではないのかと問い直す意識である。これら三つの解釈は歴史学や他の分野で変遷してきた日本の敗戦の解釈とも一致しており、戦争のトラウマの継承の差異とも重なる部分があることを示している。

ここで疑問に上がるのは旅行が旅行者の価値観に内在する偏見と対面するほどの影響を与えたのかということだ。特に目を引くのは、第一と第二の解釈を述べた旅行者は日本人旅行者、特に、慰霊団の同行による傾向がある。第三の場合、単独旅行や現地の住民との信頼関係がある旅行者によるものであった。「旅は知性を広げる」と俗に言われるが、もしも、旅行前と同じ価値観を補強しているのであれば、旅行の役割を見直す必要があるだろう。

日本における戦没者慰霊の文化と制度 —黙祷儀礼の成立と変容を中心として—

栗津賢太

上智大学グリーンケア研究所

黙祷儀礼は日本のみならず、イギリスやアメリカ、あるいはヨーロッパ諸国だけではなく、中国やイスラエル等、現在多くの国家で行われていることを示す。戦没者たちの追悼のため、大規模な災害や事故、事件の犠牲者たちのためにわれわれは黙祷を行っている。

今日的な形の黙祷はイギリスで始まる。第一次大戦の戦没者を追悼するための二分間の黙祷がイギリスで行われた。この黙祷のモデルは英領南アフリカのケープタウンの市長であったハリー・ハンズの創案によるものであった。

イギリスで行われた黙祷の様子は、日本のメディアでも報じられたが、黙祷の日本への導入は、1921（大正10）年に裕仁親王がイギリス王室を表敬訪問した際、現地の無名戦士の墓や戦没者記念碑であるセノタフを訪れた時の経験がもとになっている。ヨーロッパ訪問から2年後、関東大震災によって多くの犠牲者が発生した。震災の翌年である1924（大正13）年、東京市では一周忌の追悼行事が計画されていたが、その機会に天皇皇后によって犠牲者に対して花輪が捧げられた。親王の居城である東宮御所（現在の赤坂御苑）では皇室の儀礼としてイギリス式に「二分間」の黙祷が行われた。震災犠牲者に対する、特定の宗教・宗派を明示しない形による弔意の表し方が初めて日本に導入されたのである。黙祷は陸軍記念日や海軍記念日、靖国神社例大祭や臨時大祭などの機会に行われていき、皇居「遥拝」などと同様に、学校や軍隊を媒介として浸透していった。1930（昭和10）年代以降のファシズム期に入ると、国体明徴運動とともに、黙祷はその西洋起源である点が批判され、一度は廃止とされたが、すでに国民の間に浸透しているとして政府はこれを支持し、廃止されることなく継続された。

戦後は、サンフランシスコ講和条約の調印以降、1951（昭和26）年に行われた貞明皇后の葬儀、同条約発行以降、1952（昭和27）年に新宿で行われた全国戦没者追悼式の機会になどに行われていった。在日しているプロテスタント宣教師たちは、これを政教分離違反であり、戦前の天皇崇拝の時代へ戻る危険があるとして非難した。一方、全国戦没者追悼式は1963（昭和38）年以降は毎年行われるようになったが、8月15日を「戦没者を追悼し平和を祈念する日」と定め、黙祷の実施を明記したのは1982（昭和57）年4月の閣議決定である。

戦争孤児たちの戦後史のライフヒストリー

酒本知美

日本社会事業大学

戦争孤児であったこと、またその後の人生を語るという経験は戦争孤児たちにとって、また社会にとってどのような意義があるのであろうか。彼らは彼らのライフヒストリーを語ることで、自分のアイデンティティの獲得することが可能になると考えられる。さらには、私たちは戦争孤児の経験から学ぶことが可能になり、彼らの語りは社会に対しても影響を与える。

しかし、すべての戦争孤児たちが彼らのライフヒストリーを語るができる訳ではない。戦争孤児たちの「語り」が可能になる背景には周囲の理解や支えが不可欠であり、さらには社会生活の安定という要素も必要であると考えられる。その一方で、「語れない」「語りたくない」という戦争孤児の思いもある。本来、自分自身の経験を語るというプライベートな行為は、本人の自由な意思により「語る」か「語らないか」を選択すべきである。つまり、「語りたくない」ということも保障されなければならない。しかし、「語れない」ことや「語りたくない」ことが社会的な圧力、差別や偏見により生じることがある。こうした社会的な圧力、差別や偏見は戦争孤児の方たちから「語る」力を奪ってしまうこともあるので、「語らない」理由にアプローチが必要であろう。

「語る」ことができる戦争孤児たちにはいくつかの共通点があった。一つ目は、「現在は幸せ」であるという語りがあることである。現在は安定した生活があること、そして「語る」場に参加できる立場にある、つまり社会的に孤立していないという状況がある。二つ目は、自己肯定感の高さである。戦中、戦後と平穏無事ではない子ども時代を振り返る作業であるにも関わらず、彼らは自分たちの経験を肯定的に捉えている。こうした語りは、彼らが得ることのできた周囲との関係性から作られたと考えられる。

一方で、私たちは「語れない」戦争孤児の方たちへのアプローチを忘れてはいけない。戦争が生み出した戦争孤児たちの「何とか生き延びてきた」過程やバッド・エンド・ストーリーも社会は共有すべきである。自由に語るができる社会は、戦争孤児たちの人生を肯定する機会も生む。そのためには、いかなる「語り」も差別や偏見がなく受入れられる社会の構築が必要である。そして、彼らの「語り」を通して社会のあり方を改めて考える事が可能になると考える。